トップアスリートなのに
短小とかマジっスか！？

玉子王子　著

１章　「憧れ」が短小によって「ネタ」に変わる時

少し高級志向のスポーツ洋品店。

店を出る若い女性二人。

「ここ、Ｔ選手も来るらしいよ」

「うっそ！　会ったら抱かれたい！」

「ちょっと！　やばいよ会ったこともない人に！　まあ、私もだけど！」

「あの人、凄いセクシーだよね！」

「そうそう、体つき。太股も締まってるし、お尻も……それに」

「それに……ねえ」

笑いあいながら、マスクの男の前を通り過ぎていく。

「色男は辛いな……」

マスクの下で笑うのは、Ｔ。

Ｔはトップアスリート。

競技は水泳。

その種目では、今「銀メダルは誰か」話題になっていた。

金は、もうＴで決まりというのが世界中での専門家やファンの一致した見解だった。

通り過ぎていった若い女性も同じ競技をしていた。

だから、Ｔへの憧れも普通のスポーツ好き女性の比ではない。

離れながら、周りを憚って小声を出す。

「Ｔ選手、前、たっぷり肉付いてるよね」

「やっぱりトップアスリートはでっかいんでしょうね」

「二十センチは硬いね」

「チ〇ポだけに」

その下ネタまでは、Ｔの耳に入らなかった。

すでに店に入っていた。

「いらっしゃいませ」

ジーパンの上にシャツを着て、エプロンをつけた女性店員亀岸。

チャラいスポーツマン崩れがしつこくデートに誘ってきたときには、胡桃二個を取り出して**握り潰して見せた**という逸話を持つ。

もちろん、肉胡桃を縮み上がらせて男は逃げ去った。

そんなきつい感じの亀岸が、少女のような恥じらいの笑みを浮かべる。

「Ｔ選手、今日はどういったご用件で」

「いや、普段使いの水着が合ったらって」

「何でも取り寄せます！」

店長でもなんでもないが、あっさり言い切る亀岸。

目が完全に正気ではないが、そういう目を向けられるのに慣れた「メダル確実選手」はマスクを取り、平然としたものだった。

適当に話しながら、試着室に入る。

――ああ、今Ｔ選手がおチ〇ポ丸出しで！

水着を試着するのだから、当然だ。

亀岸は耳鳴りがするほど、胸が高鳴っていた。

スマホを取り出す。

今日の日の為、というか、今日のような日があるかもしれないと一つのアプリを入れていた。

それは音を立てずに写真を撮るという、盗撮専門のようなアプリだ。

夜中に周りの迷惑にならずに写真が撮れる！　という建前になっている。

唾を飲む。

何度も確かめた。

どうでもいい客相手に、どういう風にさりげなく突き入れれば、どの部分が撮れるか実験している。

冗談で許してくれそうなチャラい男や、何とか丸め込めそうなオタク風の客などを何人も狙い、い

まやばれることなく百発百中で男の股間を激写できるまでになった。
　そうなるまでは結構大変だった。
　一度などバレてしまい、警察にいくと騒がれた。
　が、今だ店員であるからには、誤魔化したのだ。
　どうやったかというと、女の武器を使った。
　ちょうど店長がいなかったので、店の奥に誘って写真に撮ったものを咥え込んだ。
　といっても、フェラだけだが。
　――結構でっかかったわデブオタの癖に。絶対、Ｔ選手はあの客より立派に決まってるわ！　あんあ肉に埋もれた腐れチ〇ポよりＴ選手のがでかくないわけないもんね！
　涎を拭う。
　別に、巨根好きでもないし一物が大好きということもない。
　ただ、「Ｔ選手のモノ」だけに対する執着だった。
　それに比べれば、彼氏のそれなど人並みの大きさのただの肉塊、フランクフルトと変わらない。
　――Ｔさんのデカチ〇ポＴさんのデカチ〇ポ。
　顔を真っ赤にしながら、スッと試着室の中にスマホを突き入れる。
　足は見えているので、どういう感じに立っているかなどはわかる。
　それらのヒントから、しっかりと激写するのだ。
「うひひひ」
　思わず笑い声が出る。
　チラ、と画面を見た。
　しっかり写っている。
　それで十分だ、お楽しみは後。
　万一にも憧れのＴ選手にばれるわけには行かない。
　後は普通に対応して、愛想よく帰ってもらう。
　店をＴがでて、少し歩くのを確認してから、無言でガッツポーズする亀岸。
　――きゃっほう！　憧れのデカチ〇ポゲットゲット！　これはもうガチハメ中出ししてもらったも同然！　いや、気分的にってことだけど！
　まったく意味不明のことを考えつつ、スマホを確認する。
　しっかし、裸の股間が写っていることは確認済みだ。
　あとは、どのぐらいの超絶巨根か確認するのみ。
　舌を突き出し、顔を真っ赤にして涙ぐんだ目でスマホを指で弄る。
「Ｔ選手のチ〇ポー」
　その亀岸の肩が叩かれる。
「亀岸！　逮捕だ！」
「あああああっ！　ほ、本番しますから見逃して！」
　ボロボロ泣きながら振り返る亀岸。
　と、そこに立っていたのは同じような格好の三十位の女性。店長だった。

「あっ！　店長！」

「冗談だから泣かないでよ！　で、そこでＴ選手とすれ違ったけど……ついに撮ったのね。おチンチ〇写真」

「そ、そうなんですよ！　今見るところ！」

「金メダル確実のトップアスリートの生殖器はことのほか高性能のでしょうねえ、楽しみだわ。データ送ってね」

「もちろんですよ」

　肩を寄せ合う二人。

　Ｔファンとしての熱意は、店長も亀岸に劣らない。

　ただ、立場があるのであまり無茶は出来ないということで、亀岸の存在は貴重と思っていた。

「それじゃ、見ますよ？　後一タップで、Ｔ選手の巨大おチンチ〇御開帳ですよ？」

「どうぞ」

「大きすぎて、入らなくても泣かないで下さいよ？」

「どうせ私はチャンスないから平気。むしろチャンスあるクソ女が「Ｔデカ過ぎ問題」で諦めるのを想像して受けるわ」

「うふふ、私もそう思います！　それじゃ……」
店の入り口近くで、盛り上がっている二人。
客が来たら、という当然の警戒はあまりの嬉しさと興奮に吹っ飛んでいた。
そういう時にだけ客が来るというのが「何とかの法則」という奴だ。
来ていた。
しかも、Ｔ本人が。
開けっ放しの入り口の反対側というか、壁の裏側に張り付いていた。
入ろうとして、妙な話が聞こえたのでそこで様子を伺う事にしたのだ。
そうしたら、予想以上にわけのわからない話が聞こえてきた。
――何話てんだ！？　俺を盗撮してた？！
しかも、どうも股間周辺を。
あまりの事に、ただ聞いているしかない。
海パンのほかに、関係ない商品が入っていた。
どうも前の客が忘れていったようだ。それを返しに来て、とんでもない場面に出くわした。
見るな、というべきか。
しかし、そうする積極的な理由はなかった。
巨大というわけではないが、小さくもない……と、彼は思っていた。
「それじゃ、ターップ！」
「きゃあああああああっ！　さっすがＴさん、チンコがデカ……く、ない？」
「え？　あれ？　うそ……チンチ〇小さい」
え、と思わず呻きそうになるＴ。
――おいおい、何いってる？　俺は普通だぞ。
実際、彼の周りのアスリートたちは彼と大して変わらない。
着替えの時見たくもないが見てしまう彼らのモノは、日本人だろうが外国人だろうが問わず、彼のより多少大きい程度だ。
――俺のが小さいなら、ほかの連中も小さいぞ。
だから、何かの間違いのはずだ。
思いつつ、ただ女二人の話が聞こえてくる。
「うっそ！　信じられない！　超短小じゃん！」
「しかも包茎！」
そこには、ぐさりと来る。
大きさは周りの者たちも似たようなものだが、包茎は確かにＴだけだった。
そこだけはコンプレックスだが、トップアスリートならその程度補えると思っていた。
少なくとも、今まで付き合ってきた女たちは特に何も言わなかった。
「えー、うっそ、信じられないわ。超短小チ〇ポ！」
「ここまで小さい人……まあ、いるでしょうけど」
「これだと、多分健康な範囲で最小クラスですよね」

「亀岸いうわねえ」

「店長、これより小さい人見たことあります？」

「短小世界一探して生きてるわけじゃないのよ？」

「ですよねえ。でも、キ〇タマは大きいのがせめてもですね」

「短小で回数多くてどうするのよ？」

「幻滅ですねえ。Ｔ選手が、まさかおチンチ〇小さいなんて。それもここまで小さいとは」

「そうねえ、こんなんだもんね」

　店長が示す指の大きさが見えない場所にいて、Ｔは幸運だったかもしれない。

「マジックのキャップみたいなチ〇ポですよね」

「立ったら少しはましなのかしらね？」

「あれと付き合う女いるんですかね？　彼氏のチ〇ポの半分ぐらいかな？　このグレードダウンは私ならありえないですね」

「そりゃトップアスリートだからね。チンチ〇以外の遺伝子はいいでしょうし……」

「一番肝心なところがしょぼいってなんでしょうかね！」

「まあ底辺でチ〇ポだけ立派でも虚しいと思うけど」

「そういう人と比べます！？　ペ〇スだけしか見てないですよ！」

「だってチ〇ポ小さいのよ？　ほぼ終了じゃないその時点で。チンチ〇が、小さいのよ？　チンチ〇がよ？」

「そりゃそうですけど！　でもトップアスリートですよ……でも、チンチ〇こんなのじゃね！」

「初体験〇学校のときだったんだけど……」

「あ、あ！　まさか……」

「そのときの相手の同級生のペ〇スより、これ小さいわ」

「あー！　いっちゃった！」

「まあ、立ってないからはっきりとはわからないけどね」

「短小チ〇ポを守るのは、「萎えている」という鉄のカーテンだけですね」

「そうねえ、皮のカーテンかかってるけど、これはマイナスだしね」

「きゃはは！　っていうか、チ〇ポ小さいのは仕方ないけど、包茎は手術でしょ！」

「小さいからいけないのよ、お医者さんに」

「我慢していくべきでしょ！　女医さんの所に！」

「それドM過ぎるわ！　このチンチ〇女の人に見せるなんてドM過ぎるわ！」

「あ、店長ひどーい！」

　ゲラゲラと笑いまくる二人

短小に恨みでもあるのか。

いや、ただただ、面白いネタなのだろう。

震えながら、股間を縮み上がらせてただ立ち尽くすトップアスリート。

体験版終わり

この後、週刊誌に売るというような放置できない話をし始める女たちの前に

仕方なく姿を現したＴは

直接短小言葉責めを食らい、全裸を強要されるＣＦＮＭ展開

そしてファンの女性三十人に更なる短小責めを受けるクライマックスとなります

続きは製品版でお楽しみください